格子戯詩

へ 13
2132
62

62
2132
6
藤原文庫
53

序叙

日本境の南海なる石なり。骨董家の煙管を作るに
のみ用ゐる。八丈の産のみ上品なり。
そもそも江戸の素問。祇園の買なり。
例えば江戸の町の
つきまつりまつりされど。春はやうく二月北初
咲せよう。ものの花の
の姫乃ぢめきつれて。若人のむねをしるあり。
ことをおう。和金の出初ころ葉

くきりくしく。書たる今をとさのてゆきたる。
おもんまとさうへさる。あのきやつ。きくくる。中の町ハ
曙。ゆるさうてきさちて。おきあいる。家もつとのく
とくわのるめやもー。まつて。隅田川の。後の月の光
夜ものとろいきぬくくのさま。艶よ。真字のむらも
うち出くいまさし。能もまさうてなるる。
夜のうへ。番といふ。出田堰のすくちらー。すい
ろといひちろひくとのくをつくしてくる。
子ども。さくく。時のうるもあるれやあるぬ

うんと大門きくまうり。おがれちの夜の燈え
ちくぬよ。墨堤といふのくりひるいさう。夜よ
おりーうう。人うとうちちき尾燈よいものかりまい
身たたこのことさまいとろあくかれうとき家
のいくちうつくるる。今ちどうちまんしさる。
さかひのるーあれ。秋ハむりことと。廓のなかくな
やかある君のむきようまるくきれのりとようひ
ちちちのうくよ。唐の紙使ちかちとおづまとを
かきくきりちとあとといひ出て。髪のちくく

とうちかくざつまる。いとゞ糸萩の露までもぢるさまよ
あり。十月のころかうふ杯のおかつききてもうつく。
田の面の虫の音かれくなるよのきさ容のうう好身れ。
かゞめいち調度なといがせくおぢやれきさまちう
こよなふあそれ子おかゆ色けりとそ名の居積こ
ろいとめてさまれ。役目ぢ。正月松のうち。せきぞくの
あやまち桃のせち。五月のけふ。七月中の二日の草市。
灯籠おまへ。梅花とうかろそしのときくまつ。月の夜
まひそけりあり。八月一日の志るわさは九月九月の菊

あけるとひきうちまねんしてれちていちりあひ
是日のつきしろひておどろく。志りてれ念し
く格子れとま色なとし思ひやるまひんおきいのとを
志つるこうおなうさてうさんゆれと意気のせなと
いそんの色やりてこの吹うしを格子戯俗とかのしらべる
いまめうしなて物うう色好のおのさぞさんいさてうりしか
此のころさんをかへくさくいとし

東流誹振警　二日の書初

第子
通顔艶
其志路
先支向
通支鬱
人有理

格子名丘仇名班思附
通其先通人也不出象二

格子戯語

東流觥振鷺戯著
東兵衛夢注

關

富士筑波を高蒔繪とする隅田川の吸物
椀か都鳥をなし。浸城吸干者ハ江戸
生長の息子揉りてその長ハ用屋敷城廓
花ハ[illegible]ル早し。金性の高まる水戸
尻の擂ハ擂穂まる。鮫ハ臺限る高

と云へ共、意氣ふして世の徒和漢有為の網おの
れ知といへども、是を世理に編せバ行ひ難き一向
な者におよばず。その智者といふべき者生徳馬の
裾挿拔て見てなるべきらし。當地に長
とな川て深川の極を見るなり。さ丑とお坊さん
と丁雅の見識芋やかぼちゃの中ゑ育りと
金銀の中に育つ遠ふ人なり。是に一回
の通者なり。栢莚助高屋時代の色男にて。

今ハ隠居様なり。今の世見世にむらしを
いとゞ。能當世に渡る。ハ廓の内流に拔ん
で雛妓買の捻りを楽とせしがふと新町に
多潜で犬の屎を踏んでより。始て極の無者
なる母に親じ。むとの隠里を求んとする
に。桃子下總に辻の月城見るに。此男の
極に妙を見て一徳なり。根岸ハ海堀の多い
せいに新文らさい別墨ぐらく。義極ハ囲者ども

察々ろし。本場紺沢い捨うもきを。廓をさ
三谷町の見例やの裏に意氣な竜玩ゑ
らく長屋付合といいていお隣の紙屑買お
ゆの吾高買奥の女倒さゑなり。友とも
者ハ地廻り素うく格子先の世界と辯ゐる。
ろう拾ひと稱もぷも屋蔭の打う投打
戸の外ふ新艶ぼた猴もぢうの打ゐ
のんの給羽織ふ。ゑんそ小紋のうろ
七子の組うく。ろりとを立てりうもり浜中ゑろ

ゆ記付。二日のさかやきふもこし風を洗いたるくありてげ
系むどりびちよろの茅。金ひ汲の茅どうらんふ。扇ゑ
茅ゑふさして。法ゆ人がらのうきとひ。〈はゑなし
たうのつゑをちゑひとれまん中に立て居る。〈の出ようろ組
そげて居くなるハコ ちとだまらりせい。支向 蛋羽二重
いるくなり可考 のふそで。
黄八丈の羽織黒でむくふもゑんゑのいきづきん。ゑ新ゑの
いしやだゑうさ。ようれうれたとゑく。皇のつまりたおで。
投打戸を 中キンド
明ゆうう。 まりづぜいうう。 リロウタヒカリ
ゆるうぐら底のこゑゆれる公ゑ家のふぶゑ下ゑ
〈ゑのかゑそ所のうふ。 志向 もゑのゑれどガーふくゑ
ゑるハ〇京ゆ人なり 志向 ゆ仕立を好方ゆて。ゑ義
ゆうゑの小袖。捨られもせ義時ぐんとうのゆいゑ。ゑ田の
黒の羽織。京十ふ所中のゑ。ゑんのゆぬぐいをうむりゑる

とかどさなり。おはさんおせでかのと云る（略）はさて三人いろ〳〵はなしおくの明地かからんでいるへちまとぴきな形のうく〳〵しい女を立て足ていたりしが。三人とさるとさなる家〳〵ちよいとうけこんだるハあやしき風俗なり。他者もまた〳〵。

お政　はさ為むしとなづく

多和ハはは国〳〵はなるのぎんぜうなるかてまのつやるすりてかの者白粉とぬはのぎんぜうなるかてまのつやうなるべしいつも常とよこの方でむまびはおくたう西のか袖てび柔おるすのまそ来ハし。はの〳〵四のふぶん和歌を云ている。京格ぐまるとえ〳〵えているなりたと以風俗なり。格がはよ浦桂のまんつやうかなりぐたうつて居るをぎんめ杜来うんざーでいぢつて居ーぐでり〳〵きく

ヨヤおそろひなりまつて。そきどおみうぎり孫。はは〳〵ア。アレサ。トはまり格子五十伯のぐとえ足

為がいきのとよいぶとんかまり

ぼりこいり。甘斎ぐむうく〳〵りんのめり桂ハなる二階〳〵つけるりの松なりてむかよみうけたてれぐ第のかの上かのぐのきせるのせてある。

格子

こさつを出なりがり。ちんだよ湯〳〵いくのう。日なり〳〵でも素〳〵このか。トおき重ツて幾ぶとんのよ〳〵書。むきのか袖なり。甘斎ハぬ〳〵なりハぬぐりめんの先ムぶ書つ

ぎんぜのへりをとり金ぎらきの袖口の紙子ぬ紙とう

ろ〳〵ろけ〳〵大。

孫

化粧ぜでもきておきうせちんぐちく〳〵すきとり。

―おるこちんへのり小お出ちんをとい。足

ぐ竹のをやを孫。

子

おきやアぐを。ア。ア笑ぬと来

景ぐ来く。歌撰を一巻せ〳〵きて七ッと居

たゞ白髮をぬき取るばかり。けふ
所さがしんだら此方の御ぶ代が治ふ
だいふいを結見とりの頭向う。 艶 アイサ、吉郎
が所ゞ繼を出き白合。江戸のお話をつまて
どうもうこん中たゝ。こゝ渡場へ来るとよろ
ぎゝ命ひたゝて利八と吉郎は逃て傳の
時を高ぢら川中へ押出をとゞ丸とかゝ二
切目の二階ゞ合いら見が大勢ちうちと向て富

士の白酒紅日ゞとけふとうなゐて居やを。まゞ
ちゝうゝちゝなんふが揚ゝ見ゝアや無吉物と
ゞ八十吉おさよまの八重とゝ花やかな
舞臺サ。りんゞんの男をつきゝゝとゝ出たゝ
で物ゝ意ゝなる男が来ると思ゝるアや艶ゝん
ゝまんざゝでもざいやをまいアおあぐんなき
をとりゝ爰でゞんと呑やた。 子 ゝゝ玉姫新藤
なゞお立者ゝ元伺ゝ。 路 モシ 浦茅ゝ原へ

黒幕黒二ツ重若衆雲助をさいて居ようと
いふ噂だ子。向後人〳〵とい旦〳〵ていた様もがぎ
まをまよ。路一ケ四文が小秋番夷のせまいと
喧しやまう。小秋といふ子こいつはこいつろう。
時ふくんなハるく時分だろうのお政や白我
が京物の茶でもいれさいせいよ。白息子一町
用う〳〵廿日出のみが来て居さいけ見もとも。
この事だ俵〳〵。トいふハ見るつろう。お政ハ出るまの更
立てこいろおよびでしゃいまさぐろを

入せくけなぐ〳〵。強面屋がまたト母のふくろ
戸棚う〳〵茶を出をついでかのみを氣ろんふ流。△路
ぐちよろのさんどのたでこ入。そのなれそめハふとゐる事
きせるを火むちぞちよいとさき。
か〳〵さ。与四郎が家で親とさうこまて居ほ形人。
いいも妻ほいひ男サ。り〳〵お利ぐどざりやもぐ一向
なせいさ。お客といふ子でござやすが一年わど
相惚のふひをまて居さ不ぐ。ぱせんぱいとさいうげ
られたとふひなせい。その云分が何分ふいふさ。
こきが出来ぞバばいぶんが悪ろう来てゐるなとゐう

と切ぶ生。先ての晩ハ承知で聞て見たが。それ切
ふ来てハ。ものの内人。新が出されぬ。口惜ふ。なりや
せんがめんさんの箱で。一番かきくるさうでぎいやすと。
言まで。新やす。ふるしもその時分おかしくふ
毎度。角がなのいろ。是も同し節で。拡宮まぐ。おし
う事て来さを。蔵を。苦いたらおりふさま。聞く
聞て。ゆるさそうさ。こい聞が。ほめがいとや。ほ節が
ゆうそふなあんだと。泥の。昭物小ゑぐ。ふ出

さきず。首を。移ったが。丈。点。さんろう
言合て。ものちへ。聞た。所が。夜。の晩でまが
鍋。燃へ。突。ものさいて。行。聞。屋。取。たが。かん
あくの。始と。見せ。掛。子。人。欠上。ゆうし。ほと。娘が
おかくさんハ。仕。舞で。出で。居なやいす。アノ。ふも
ん。待でも。ものて。居るのかで。アイで。一。おなのんなさい
とふ。和。徐。法。ふ。小。ふん。夜。来る。仕。宮だ。アノ
蝶。が。おくが。見。通。よこを。ふたとんてもじまう

孫いおかくが家ハもひ切さぱごろ皆新子の
お寿とやうを学て来てらを孫といふと娘がお
めいさん家ゲ遠ひてさそうだどういふこうてぐちを
おいせいをといふ。家もちゲ孫いが独の孫いのぐ。
嫁せずハ芸者を買うて来いろうとど孫さを
ちぢ小見てとりて。そんなうんでの事や寿
とぱ寿々志めいかいいた所が。ちゃ出れ。今家
のお家賃。来さ家ゲ来ぐまが。拾ぐ。

ゲふのの人塩酒石をふりかけたといふ小飯の
べらべら。新ゲゲ。嫁ゲ新造のお萩といふて。
素人おといつてハかのめいか嫁をなくなった
妻女ゲ。癸ゲいぼつてむしがかぶつてさげをの
ちの客の居漬を家を射ると顔色さてちち
ハ何らちひ顔で。硯蓋の意姑をつまづ
小居と。ゆもそれて独子を拾ると生を
かいさを去て居ゲ。ちとなちぐとといふ。

這入と直ぐに寝て。顔を見詰て。何だかりぢく
きて居ほとお爺もあゝ初いぢんくらだとゝろ
さてそで。ぢりゝごきさんに小眼くらを去ていや
たがやゝおかくさんを後なきた取ゝ見つちらが
出居ハ命体ないぢ。ふせうぶろうがつきやゝてお
んなせのと如しみをむ事やす。爰がやゝ女サろろり
と減ぐむとなんぐゝ若ひ顔を去なるほがちり
けでないぼうのくゝどうきなるいさゝとゝふとゝ

たしが振声くこゝろぐ。おめいふ頭がなるやすが
ぐふも面目称い事サ。まあゝ入てさんやきろう。ど
の子も一個でハ嘸やゝさが。生身て無念なろう
たが。彼ものが厄介でついぞなるる子がないのさ。
お爺ハ物好で出てくられやさがおのゝだ居い
とゝひなき作うが。どふぞ幸抱きてなゝ入ろ
んゝ移ゝとゝまで免ぐムグ〳〵小ぎるを去ると。這な
やゝ入が新ぐ火のよふなゝ入ろ。猪を拵し。去ぢろ

く腹でひかれて居さがそちがはこのつま先
をちよいと曲て見るとちくいやをとほのんだ
らうたまらぬ烟管と煙草納をもつて脊むし
のぶいとよ身ぶるで。さてこれさのサ。此ばいひ。
所へおかくが来て大ふみサ。おめくそふきそくん
なさる事ハござりやせん。奥のお客ハどうなつ
てもいひく。今夜中をまつてこれろと門辺茶
めしの色食のよふ。そつくらふ娘や私所もを

いまこ所。よふく安届たつぐでそんなく承知
ちく呑なをそうとたをををんなを仕舞ふ
ぬつさ所が。今夜のこれてふくセハめをろつて
大深ふなる。おくも大人ぶ事ふなつぐ。お客
さん成大雲ふちやちやうと下ふお針とちな
ちをして居さを兵理ふ引ぶつて来たそう
さお客ハ陽へ這入く酒も呑ずにも吟ぜおち
くが顔をぶ絵ぐ見くハふこくさらうと。

おかくが書が紙てなんぼ位子ハ人の新ハ祭
が通りやアきめしちりと右が鼻の穴人の切
をきて。だきゝ。おちよくも面れバお猿
ゐる。りりやとんまつるがこゝでも貴セ極人なぬ
極人産所度人きやアぬいうとゝとぬ書もロハ
へらバ。アイサ赤貝へ指を突込とぬけがをきや
をとゝと。あゝな来といひなるのさんざ
ぼうしの黒焼が推草の船玉とゝ髪の風で。

なるきの二面も出来ぬ極くたきなぶりく則ハ
抜き極くた。まゞさ左地の風もきゝ極くで。きゝ。した子
きやア極くかと置を投付ぬ。抜書ハとらんてきゆ
く居る黒く拵ちきこんで大阪合ぬなるとゝ。その附
小茶一帖てチント鼻とかんでゴ抜かくとゆ四角
とゝ。おゐるとゆ。夜書とゆ。四の年をぶよきえ
く渡てゝく守よ赤かくも代稽ゝ少く面て右
原とゝ都ゝなる。そかあれが来だ砲原の月

と見る事になりて、ぜひ〳〵天像アヤ、仏体なくも
冥加〳〵紫鹿黄金の長羽織を追剥つりれを
う塚の喰安ろう娘ろ赤〳〵袖かく綾でく
めぐ顔をろろぜんぜんあたさらさの鬼とて頬れ
せ拍子なるとやうも大きなにだそのにくくさい息を
吐と七里うかむだろうちゆとりをの揚枝でも
笠〳〵金ぐかしらぐ子路さんぐぜ土地〳〵拍子おおい
四ぐつさ赤〳〵物すて五丁町〳〵ぐ見バなた

まりて〳〵舞る大神宮八神〳〵おかく知たら寄細
八御かおぐ〳〵ぐ物〳〵見いらがいた一でん貝〳〵三蓑
月の家をとり〳〵今活上戸猿之上戸鼠上戸を
ちせてるぐ落ころちの仕組ぐつぐも神〳〵とい
とぐ〳〵やいとりるむかりてぐ〳〵りハぐ〳〵ぐ〳〵
ちまぐ〳〵と大なくたのサ何がをぬりがにを学て仕
泥ぐ〳〵と云ぐもんたく〳〵抑かくぐ干鍋問屋の
新とやいふ客をてじぐ〳〵ぐ切て去ぐそいぢぐ

だうの天ぢく。トバムらかく。トきいろなこえでぱるをきな
ぐらぶ。ぶたの度きよこだぐこのこぶれ。向いひく。こ白の
たをぶりくこくこくこをあつてこなす
渡ぶ船る。まじめで泣うちぐでんぐうこ。艶どふも深
川ハさんこうぐど。跡ぜんこい源川ハ。客を二番目
の菖蒲ふ。ぐうこく。ふ供ぐ。ふのたてむきうつよ
かう。姉て方ぐうが姫と子とうんぐ。かきいひのか
芝のううの客だそうだぐ京町の産業指と色

艶丁ちやどぐもみたちた事ハ生来稀ぐ芸

事くかいさか有て。遠さうれて居て。ぐの遊客の
町ふ長屋ぐ。假ぐい方ら通りかくふをかあ後ら移扨
もる我。アイといつくたうて。彼客を展用ふもうあす
カラくくれ。ると。客ハ。ぐたをて花扨ぐ之朝ふむる
松とふのんくむうふ二階くの事ぐ。ふうくくふうくて
さてや。大ひきふ恋て生ぐだうきぐたそうサ。ぐいらあ情
そうく楽したのくトもかして居る更お。成ハふ公なを苦してら
うくく大ぐも半ぐちうとかんをつけぶくぶの四くそうけのかくういて玉
子とちのとくくきぐいとうろて者ふ出ぐ成ぐうちうきのきいたりの

子 扨もよろしハきくかたざろう。 艷 モシ その扨茶碗ハ扨ハ
アモシーとうん〳〵ア子子 子 川伊の白市ふ出さのさ付代の
いひ月のう出ーーん寺ていぶ扇屋のおく屋敷ハ色ちく
なりうりたそうた 艷 ぢんと門の紙屋でド豆屋竹村
の耳高梅〳〵ぷ志う名弟去身サ。 子 ウ〳〵 艷 長居濃
ハ志福〳〵幸孫。湖月の破中の見出ーーちうう〳〵いひ多
ハ愁物ふぶん豆いこうかろ〳〵ます孫 路 深川の見通
ヤ〳〵。探幽のあうていうの浮ろ〳〵最ちふ高い 向 子路

さんろいぶちむきだが。深川の鈴ちやうんやちくなる
と一蠟ぐ麻倉踊とうるんで怪ちづこふなりますよ。
艷 そこいらハ秋江や大坂屋いきりいのだの。 向 伊
助がとこの二階もでいぶちなるると孫。 政 サて子路さん
扨ちぢめ面せ〳〵ぷハ久七城江戸〳〵豆まつろーーやちさ
ろう。扨者ハちんふもなーさドレ扨見せいつそきまいだ子。
まいた煙艸納だ子。 艷 竹屋の遠列どんもさぷちり川
のぢよちん好のころんらん。政 いつそ扨め〳〵さん

のまち者ハ云家にいひもの子ハ四角と申〳〵人ハ
ながいかぐぴざ〳〵出ているをちよいとかく〳〵色家をん世て
うをぐ〳〵せるつもり。おきやあがれとうふ〳〵ぐ〳〵なり。向あまなぐ
ら四角ハ利世極人とん指ゞ悪い。政ハ〳〵だ〳〵ちいつ
子何もそういきがる事も極人髭ハ巨燈ハおつぎや
の麦茶とゆんぐ〳〵絵ゞあの屋せ。こゝろの中〳〵猫ゞのびを云て出ゞ王子とハウタトふ〳〵む
政ちゃコサ。切ゞ〳〵るいぞよモフトひざ〳〵のセおごの下を白をゞつてやる路附
ハ今〳〵髭さんゆちゃうを抑ともで深川〳〵ひ箱を
ん出〳〵かいさハど〳〵だろ〳〵ぐろちハめづ〳〵ちく町

とゆうふちゃちゃうり髭おゆきい〳〵ちち〳〵ちゃ度
ふ抑よんさあれとちつとさんゆの出来極人彼もなり
すう〳〵てう〳〵といひ路ロたちがきさ孔もゆの立極い
のと極つ事の竪長猫のうふむ川〳〵いう〳〵廿髭丁
も極ゞ事麦ゞ欠ゆちる見せもなりやちゃ家
表門ハ張な事サちゃ〳〵深川〳〵家ゞを知〳〵くハ先
極人對ちてゞ極人ゆ子口その箱麦〳〵抑れといゆ
極人ハゞ〳〵〳〵ゆせ。水清まれハ奥住ゆ人玉つて猿

ちなみに附ハ拾ぐ。蘭堂のちふついて居る。孫むそ
うる竟を見る。コレ抑ハ色男かとゝバヲヾ此客人ハ
とんだ事といふもの。アリとふも色男ハ抑いらんふ
かゝいかゝれなんと。あるもてうきちゝもそんそ此
とをそ写をうゝ蘭堂のつくやとゝ此ちられ
いた。トレ大をい迷ゝまいんちゝ抑出ちんしと
まゝ蘭のつく年てもちへふ小現好さ。モラ抑つけ
二月て抑さんを孫。大正舞ゝまいりんちゝ孫まゝ

市の喚不抑出なんちゝ孫。去年のよふ出屋ハ
いゝんせんゝまゝちゝ去ゝとりつて来て抑ちんなん
とゝ。モラいゝ月舞ゝとかゝさんや月大とのものをられ
ほふ俗とハきゝい遠なゝ。此をる内もつい様ふも
此迷ゝを絵く書面ゝ屏風を調てヲヤ此子を
その歌ハなんのこゝ。ゝくふ此事をゝつゝふよと去
かゝれゝを立てゆゝふ俗さ。をゝ負抱ハ能ゆ乃
如く階ぬいて舞動ゝ仕ゝそよ。此子ハ面ひ舞ゝよ。

客人の家でも客をかくのだちどりや奏をもく
そやゆうそよ。大ぶつひよとむせうこいなり。やうてい物
事ふもる若衆をとこもるちやを事ふ憂淺をなつかし。
八文々淡路水その外の小買物の丁雅の如く。まるい顔
の大い蕊ふいぢめうをもるもみそ面ついふ泣き出さ
の附ゐりて。世間もようふく食くあるとこハそこ長
の義理つ事とを事金盃をせんとまれば身のうへぶ
廻ふ。ゐつを内流の世治ふもあつていら是弱し。

私面をて客もつかぬ附ハんにをふをもるて女の
身で生るぬ身代を取まかるようなりのあて。
かシハ所痛のする日も拵て中の町を勤いとかし体刻
が大事ちれバいかうんを行う。客人を云出も
とても身をきうをるようもつらい事なるべしで振
袖のうちハ面ちやをもやはだりきいて。座敷まるを
痛ひぶりつたいなるハ。浅生楽かとをて抱きをて
痛ふ。ぶりくと物騒るのまるハうを事らしく見

てもきんかんをひらたくしたり客人八命もやさ
いとかの程の色もなかなかんとまぶらかな森瀬と
つくり見るかの樹木の外の果敏なる大屋かの信
出さるるもなかなかのかの年明を貴りて若男
を出ても一生を若きこと男のあるかの糸ぶまいをかたで
なかなかいかを天五次郎の外のようかとかとかとかと
きて一てう犯人の家いかくなかなか色家に云云
者がおてう自法果のあり作くない程びをする。

外のようを信かなかの姉世命の五具外の男の
ひてん
分員回かの人形とかの大人の客の切かの家の
毒なるかの我も色男の出が紙て長れとも扶後も
できをどうきかのうとんたでかまきの
どう命なかしまき交りの色次下のその産資かち
みて
皆見色で揚りかの産資持の外
揚りとかるもかかきかまぶかの一産かの見色が
有てとーの働で出るの色しへ下のお方の客

梯子をのぞいて俳さん八揚ゐてかとゝろれへ下いま
紳へ出なんしたゝろちをかゝみゐ揚て抑ゝんゐん。
よんどゝ孫ない用事ゐ抑すゝごせゝさゝゝんゐ
かゝゝゝ迷ゝい孫と二階へ久ゝのゝ。掛産業を勧ゐゐ。
同じ濃密の如命ゐゐ。我ハ業居のゝゝにゝゝゝ。
蝋燭のゝんをゝゝゝよい客もゝないと思ゝゝゝゝの器
ゐ浴衣ゝゝごゝの孫ゝをゝゝゐゐ義ゐゐ。義ゐ
中の所でなのゝゐ仲人ゐ出来て。新造買とゝゝゝ。

十八

孫らゝて仕まゝゝ。燒なのゝど。夜深ゝく妻産業を
孫ゝゝんと。梯子の際ゐゝゝく居ゝ小仮ゐ出ゝ
客だとゝゝて。孫ゝゐ稼我ゐめゝく通ゝ我ゐゝゝ
抑ゝゝくゐのゝれゐ切なゐ恐意とゝゝゐれと。
やゝてかのゝ来ゝゝゝゝゝゝゝ二階でゐゝ
いた孫子。どゝもこをゝゝんをゝて持て来ておく
んゝんゝとゝゐ。其附それでいやだとハいゝ居ゝ取
知ハゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ来ゝゝれゝゝゐ。

かりと先でも日まを多くすく仕まつたそうで茶のようす
不敬もよこさず座分りく家でひろうが何ら百がぬ事
ろく一月を二月を津いそれなりふなりて仕まつかえが
ひろちもこうちも掏巣用うそぐ巻た色事の等
為盤遠ないとそんだ。かを狩もうてどないきよの伏
をを安てい扱うきなるもこれたを極二面博くの源
伐擦ていろうて奥の炭やりだなしふハ博ぐ巻
ぢ。ろ尾がいろう。ふ代廓ていうぬが稗とろく

だ。どうも沢もいきをぬ所が有ういきうくちを巻ど。
代廓明るくちの沢と。分分やこ分ましハ我ちがうろ恥
かろく寝ぶをちろそ。れどよと見巻ぢ博ろぶか
なろきも又代廓。都ろくあ先のろいうちが極しを
沢よし。其真を志除ふと逆やすくをまりがいく。
なんぶうをかう移いホよトホ分もきいた所のないまで
こつちも家新だとい家位なきどでうきを合せ。そちろふとこて
きついとを角を十れん目かどのんで志まろ。又代ちのぐろもの杭
の内だろうさいてうろちが気きだとろい
がしめいろ岡お改いこをつくよりめり無こ為て

ばゞやあ多のそらおいおいあんだらモつぞろぞろ来い子ヒ
ちり乞と目見せでもおゑしなしかれしな、[絶]アノ讃
いひろせん寺の七ッ屋の御縁日が縁あい。[路]左の
紅紙何万か。おさまりかちよか語り。サアておせきてゝいせい。
よゝくのむぞ。[向]こふぎにようて立なから。許ゝ人のまん古ゝとけとます。まんアまよけいつま
ばきや座敷蕎のむ合羽。[絶]むかぞの落居いとぞ
だ。[子]めちやとこのがりそうなりんぶ。モつ鳥の待つぐ
なくてハ來めいの。[絶路向]ゑゑんとなとしぶとこなりそちよいといけり。くろを致らぬ〳〵あまよ

さんおちらいうちに[須]争い絆ことされや
来る。おきらづ糸。[子]チヨツト路次板が本縁ているゝ
ぜ。ふるつかハ一茶屋ねね此日一一みて
トうあるなげ 枝打戸をゆる
○木戸ハぢさといひし、ろドを出かみあひどこの家に日行よし
どつ見へかうかぎり日より木戸ぎぎろ袖ありそ業の他出入の際
本の家十ケをつぎきで穴をあけ割が立て作りありく出ている
守ありて此所小役さ用のれのたてゐる竹やらいのさま大名
衆九のきうれなとよせてながらつ小べんをし子路ハ立られて此れ
路をまあへ出る。実ハ條り入らでゐるとおんせて此てあち吉原に包
るたら出生来てた。ぶまよつてゐる女全人三座てハおきこ恐るいるのが五
女人るぶいるなり。凱凱と突向ハひ縁りていひとうよそ家とぢり
で猿ゝちよきさにのり柳樽でのり之て仲丁へ中く此きやきハ
ぶら挑灯とゆふ年にかうてしおきぬ。

似者吉原之事不知

ふき屋其二皆下座敷ノ之ー

てもの大見世の二階といつて廊下ハ二十三尺堂の如く小長く。格子い窓巴の石壇ハ仰て平なり仲の町より通り表屋中座敷拍打三張ハ名の素ハ見を見せ引ふのうす更と家を建る新道の廊ハ狭中流しくらる大尺と思へ夜具数ごあの風を肩し切て矢上きハ引ゆ

と釣りて揆打いちとこたやまハ筋ハ若者がお
たてふ猪鹿去屋の拘。内儀よりよるの慶蓋原
屋が送り物。ぞんぞんより拘迎三張第風呂敷
ぶくしい二てく敷ごだん人形の全なる産数な
ぶぐく。東西ハ犯遠ハ中を辞もとぬハよるう
出もせぬハ小役ハ出ハ客人ハていと羊羹ハ酬
はまつく面ー。色と御顔でと云いくんく去
まつて八丈のないき茶を茶でむすぐだめん

のきなる筒をいるひ付さのべとぱき細ふ拵をへて。そ
しの座敷をの新屋へ出さう遠へ入りきほいき
なる浜若者や娘ながらびさつきる時。アイと身を立
屏風きく見儀をとり。まきこふふて移いふ
しい新ろこを見せんなるべし。廊下をそう歩
きい突当さうきをそうな年明まへの冷たし
一向とくらかり。他者だりりておいる
か休見町で見る事た顔あり。きり遠ふ色変
を見せほ十代の冷たしか中の町て舞骨牌戦

取りて振り顔なりっいぶの動るそうな袖袖新
造。娘家らい振袖新造。座敷くをのぞけ
べ。女命へ清んときく立縁当祭粉金とせきに
筋遠ふ歩り。客へだまるまんく三方とかるにより
つてふふ歩りふほなるべ。五丁位六ぐらろてふ。
清めらるきんぞう廊下へふ番出を売沢へ雪
まどんぐと猴なりほふのたや屏風を引廻きく
次の間のうをぐうきなり。寝引ふ立ふり居り

きせる屋敷。茶屋がのこゝろみ。長煙管。なつかきき書附
新造つゞらいれのうそうと客をまごつかす茶屋
なり。是を茶屋小屋と何うもなんぞと云ていい
ほ和ぶん。安宅と赤下着を見せる者て下座
敷へいく和ぶん。揚枝を与へなぐらそれ
禁ふぶん。なるく和ぶん。茶筒の中から何うちやいと出て
なるく和ぶん。なるべしヨシ
なるく和ぶん。なるべくぶの中へちやとそいつた和
ぶん。夫婦の如く和まんまの者を客と和ぶん

きせるこゝ屋敷なり。一座新造買客へ通りの
たゝさの悪きもあり。女郎いまか紙とゝそゝ内。
こちらへ次の間へきんホなつて和まんまとゝて
居るなきへ。うつむいてみかくなりの百人首を入
て居るなり。癖を和さんて居るなり。見世三位
を見ちこなつて居るなつ上しとゝちやかなり
。朋輩のそゝて何ぞ人りをまつゝ見て居る
なきへ。モフキアノ子いつそ子をきゝ人和とこ和きて

あるきんきてこ猫ハ裾を引きまんきされたら
モラリとハんだ。きつのて抱つきようハを絵むが
つて客人のところ小絵もつくりひきさと告はるな
きハ。何ら障子のかきくハ出せば。うるさいて客
なり。リレハ糸鞠虫がきりんきさと庭のくなきハ
。ちやアいや土鈴を絵ちりかえなんきさと
猫きなり。年い子きちりかきひきさ死てい
よどうきて泥かきいきのりなんぞもつまうと

絵いでと。なる絵色事て客がちがうきと人にまう
ぬいこうい新造なるハ。モレハんぞハ見ちが客
人へはきうきて抱んなんきなどもこの人
きんいちめなんきうーせと速くのむなとあ
きなり。こハ客の時を見くハぞうきいい
絵人とハなり。つくいのりとハなり。らやたのりと
ハなり。おきていを一番かとて。トレハくて
絵んきのりとハハり。きなり。そのはを客の床

（ゆと若衆入くゝるとき奉にだまつてそゝる音
程森なりくゝ無くてよるを密の迄自まぶまぶくと
ゝて居れハコリヤ降ぬ自をおサちつとよんでゐる
世なんーなるぞ。今をきいてゝにをちつといてゝ
てもよさそうなものを客にゝまをせちがゝぎろ
くゝ顔を見ているいなんで恵にを見出ををさ
ゝてゝ門絹欲なり。もこくゝ廊下もちぶまを
ぶりくゝ来てそうなりつと。夜寒ゝ気かぶつてまん

甲ホ森て見ちが。庭先の様子でハまつたりき
たホ遠いなゝ。こゝいなゝとなくく行よゝて森て
居ることろくゝ。イヤもちゝとそちゝ見て居て
んなん者といるを世るがいひちゝ意地悪くお
りゝをてゝ一大事とそやめて大事でいゝ事
をを工風ゝて居る和尚の客なり。ゝゝも案
まいに。紛若代の者ゝろくもなんとゝもないなり
。大ぶちこ紛ちくゝ思を神なるなをべ。有会なー

に移り来りたり。藤の音の是代をかやかさ
をるなり。扨の志賀くなると色に客をせかれて
りりや小山附雨きりかゝるなり。今き色くへ
らちがうまるひせんそうちがうまう弱くでも
らちがうまるよと世帝ふ寄とも生すい物
男もなり。いろくさるゑじの春の中一つ二つ
真ふ艶なる拍色事もなる麗きれと。是を
突尚るい天冥のきかゝ去むる不なるべし

○扨彼志賀い迎花嫁に独さみきくゝ附をうつり。ゆく見学も
ひけたり。おりその人迎もうすくなれば書花嫁の色ん
おを明てゐるに白ふの表花嫁も今を世ゝじふりげがうしの
ろうろうるもことどうどうりさがりいもりの兎が芋。ゆと
を音ちりつるんのかながうそさむの中だちとなつてひつさ
まとなる家の中。小仗家の寸殿の音のゝ拍く 廊ひへ
ゐきて志んとなるころ。お方の志んぞうたいもなくねゝ
志西人拍すも寄のとくとゝ思い。色寄とゝつてい夜ぎの志ろ
の白ふのゝなり。家くの八ッの刻くゝぎカッちくと男人。仮媒の
白色者だくりおきているころをいきんとふけ波る。志弼ていろ
なるまでも拍の見西びへふ。ぐるの色んちんはなる色べくふの外
ふを字に。ひけふ場ゝとりて志のきぐ衣ゝ西へ拍ハと大きふ
世りて〜何ふれば。ゆハ二十七八の世ゝの好風の色男。世ゝハ仗で
ろ引辺て居ゝ世ゝ。ふ洗し髪をひきつめ髪ふ世いてろがいをち
よいとさゝなるいきに志て。ひついさいかとなる色さろに。面世さろ
顔の落化粧り粧のうすなるろて粧ぞろとさるかどろつく

あく。白むくの袖まき込めぴぢりめんの赤こぎを敷ふ抑あて同
とともふ新くどくみそ。くんきゆくとおきて内いるに色男
もらてた顔色そ。客コレそんなふふいで居る事い袖ぷ
どう抑かつても抑ぬぬ事さアごうぎにやせさで。
客引迎んぐいんきさうちもの事でかりなん
赤いきて改痛のせぬ腹とうていおぎんせん。兼大体
や大方の若しい袖も知なぐ。つの寄うさがいもなる
かのように。まぐ実が通りいせんぐ。たしいんや赤
う抑ぐんを　ト赤ぐを外しくれすの行屋とやの赤を
袋ふ。大屋のきぬくとんかさなうす琴の

言尺八をまぐ俗とい実ぐ称ど
ありやをその一曲赤んとさんぐ。一寸新鮮のゆめ
をそのう抑るたまうに二ツやうんぐ抑ゆふ屋で
うこと一寸鮮抑でかう抑ちぐうもさアよいさる
客どうもちもぐでパテそ色。出て居る腹なと赤
なやア色ちア。名をゆうく為になる客ふ猿をうで色
ふでも袖へと。茶屋かうきぐに抑れべかぜのうう
てん色袖へやうう家だのどうちへでいうろう
とかんまう乳ぐいあ色ぽいかん赤やぐぶちも

たてるもはなしんざまにきふい居漬を仕ようと
いへどめ（ゞ二階の窠とう移てむりに如きとふ
とて水ちうちでたう海しさがる事も移へとぱいこ鍋
ふあんくせいうきさいたその場の窠しといふ
りんざんこ移ちち内ふ拓りやアふさいでだうる。
とうちへ山をやアのこぐ出る中の間へい顔が出さま
ぢ。まうこ二階がふさがりやア。活ても死んでもだのい
ていだりぐなうる海しく来るもいひ法たと二

階中で笑ひ話もなんふんいよてめへも海せ
川なお仕ふ。由ふ りり市りふ覚悟の窠て拓ぐんを
ヨな倩岩氣の高くてをんをいだがいのとうて
のをいはぐこうなうてくんをりやアどうも玉村
きんいうふこさ白の内でも海ヨうちを拓うぐこ
なんきようがこうちだとうこ穴ひい拓づくてこを
蓋やうへぐ海やたでいかし。来年の三月い花
根白のとへいへ海うぐ。だのきんで拓りいきふ。

[illegible]
コレ智ゲ言ゼコ言テ今ノ言ハ[illegible]
どゞく。言と分めくりんでも極く。そりやアたうとちう
といかさでも附たう。世ア アイサ それもこれもどゞせう
とおもていひまを打。とうさんハ病でなきかいふ
も出せんくちと働てられるときの人の晩 足
芸見がすて狂うんまを。どうでもてと結合く
ぼのうまんたふ言ふも御殿うまてん極く

客

事をいひまを。おさきどんハなんのかのとくいひま
し。おまをていとうちやア御ぜんせん。まも今義と
やゞをまんまうぶかるの紂ようも御ちうまれ
どそう言く倉智を仕る亦が。なんまり能くも
のう言いまをまいしよく 徘てうんまをやア言ゞ
よく思ひ切く御ちんまる。客 とんべうんかを
孫だのあ川と揚た和名代がそんなに深も御
もうのんぶがどう言事うとうれうて者ふの

糸としまりくたぱ書三月が天がゐの死神ぶ。
色と指ゑ立せりまくる。あききどんやたん
どんの糸をはく作りたるまんふはをい鏡の
事をまくべりつそ孔んざがまてざんまりよ
家
[illegible]ひまりまのまのうまんな[密]コ井まづ
かふまや[illegible]まりまでそまるのさんのう
やまりのいやまなさんのとうはとゐとゐ見
あるまりのあのりひまりとあまくみでたや

三十

[illegible]。
一つの位牌ふ。茶花活にまきて。袋戸棚を押ふきがざりてなりの
の水。瑠璃一生んをゐ生ーまぐ。おがいぢやゐんのゐ向
下ふまま流ふ。巻ちくまるまる利カニてゐ生ー。ゆのゑ
ざふ打りまゐ。注まくづいまりまぐりくゐ新をあげ
コレは作りまいーは位牌いは茶この茶碗に茶
なんまくゆ命。病家ぢなりくなりなんまくと。
人の分のとでいなるまいと命日にまるのふ菓子を
買に参りんゆの同向をまんまくがすいなりまの
ゐれくが分のとにまるんまくもへりこんぐ

いんきょはいかくうんがくをきてうんなんきた。
門僧の和ふうさん。乗をかくの門る恵もうへり
男つ恋。素年素とやく〳〵糸んを。却級なんきく和
うんなんきく　そや田中の方恵知死和そつぐ清の事
代世のきぬ〳〵冥途のおむうひ
あんなかのうきくきくめのうちいそぐむうそぐ
あをぬ今日でつあぐつきふきり　客　なむな
うぶぶく　志路　きくるくく。屋風の中へとび
うんざとふとモシへうちうさを〳〵なんきあへと却て

きれ。家屋が却むういい夜いさくをとなきくく
花然さう。実義なかくもけ世所。我を色ど
かきで通一番かいさうい恵きれど。却りふ夜
無の客に情のなるい直なるとふ屋ぐ。真を
恵きいなで一人にぐきる。夫を却なへて仮堪み
真なしとんぢさぐいい大きなる縁なくんう
さきぐ義理と情ふ迎ていい百年の命を捨ぐい
けこ廓なう。越ぐ世界の婦人うも色を色と

ちゝ賢女かゝぬ日なし一の色里。拵ひうぬ惚
なるべ遊ばなるべきます。自然郎の浅深を探り
得よく撥び得よく樂む。孔夫子もこれ可
なりとゝ云めうん。吁は道明るゝなるべ。義取
に突なるゝぬ用ん〜〜

振鷺亭戯作

格子戯語跋

氷砂糖と高利屋頭ハ訓同じ
い一丸。耳と辛の齟齬ゝり。今振鷺子
の稿を発まゝる。辞藻妙絶無類
飛切嗤かゝる戈を成生せしむる可知
造物者の帥沢。兩親の細工の妙欲
若博覧士ゝて放屁作者の黨小

いうざるは感じ。砂糖と生瓜の類
形なれども。中く可與言者
耳にして多くは。なとと言べし。
于時寛政四の極月貧乏とゝ
艶天狂和。苦しゝ紙上の妄語を
悪作法
畫候
[illegible]

識

夫家法の沈約筒讀さる其説ハ四
十四篇。吾日本ハ紫女が法華經の
裏面に和ぶげて其巻ハ六十帖先生今
和漢一帖の小巻不杜撰して艶なる
塗を説。されど所道の逆妄き。戀と情と
色と金との四街ハ。江藤の中央に陸沈
しゝ一れ未ゝ霧鳥山の説法鉢池例の
畑嶌に艶色と説ハ何の言ゝ知べらべと

先生喟然として嘆曰須庸の人工觀へき
稿まず　ずと吾聞下邳の一縊四百年乃
墓を辟く今や何岩寺の一庇四百穴岐の端
鍬と呆る苟四方の面る此書を熟覽と
るさば傾城の涙真赤な嘘立蘿の面八字
の物ゆり玩小十誓吳川八贅憑第子等面々
落くの一座七人去て次の問子姉妹のお毫をかり申
さんまとよろ上　門人　關東兵衛　筆誌